

森浩一著

『考古学と古代日本』

(中央公論社・発行一九九四年三月
B5版・七九七頁 四、八〇〇円)

人の掌でいつくしきみを受けた焼き物には実際に体温が感じられることがあるように、物質にすぎない考古学の資料が、人の営みのなかでこそ生きた役割をになって語り始めることを教えてくれる歴史書が、森浩一教授によって上梓された。

過去の物質資料そのものを分析することは、もちろん考古学の主要な研究方法の一つである。しかし、それらをたんに説明的に羅列したり、いたずらに難解な専門用語をふりかざし、あるいは呪文のように反復するような専門書や、新たな視点を開く可能性を秘めているはずの考古学資料をお仕着せの枠組みのなかに閉じ込めてしまうような歴史書もしばしばみられる。そんななかで、せまい専門分野の論文や書物だけでなく、多様な学問の成果を取り入れ、実際にさまざまな土地に踏み入って、生活の中に息づいている思考や技術を磨きだすことが、考古学の資料をもって、往古の人

達が私たちに残してくれた彼等との接点となしうることを、本書は豊かな歴史叙述を通して示している。

このような著者の実践は、「倭人の世界」「地域文化への視点」「山と里と海の交流」「古墳出現までの道のり」「古墳時代と天皇陵」「日本文化の特色とアジア」の六部から構成され、二四のテーマからなる大冊のなかで縦横に提示されている。読む者は、考古学や古代史の重要な問題に対する基礎となる事実や議論の焦点についてのわかりやすい叙述を追ううちに、その文体ともあいまって、流れるように自然に創意あふれる歴史的視点へと導かれていくことに気づく。さらに実際に現地を踏むことによつてしかえられない変化に富んだ写真や独自の視点から作成された図も、よき水先案内の役をはたしている。

また、いつぼうでは私たちの日々の暮らしや仕事のなかにさえ、古代との窓が開かれていることも示される。冒頭に象徴的にふれられている例に、先史時代の交易活動を体験しようとして、手製の独木船で日本海を実験航海した小学校の先生たちの話が

あり、行動をとまなう知的好奇心が活気とともに伝わってくる。また、巻末では、古鏡に鑄だされた「うじ」を意味する同音語である「氏」「是」の二字が、「万葉集では」「是川」「氏川」として現在の宇治川を表記していることに注目した古代人の文字理解をさぐる考察があり、歴史の糸が時代をこえて私たちの身近にもつながっていることを印象づける。

本書は、人間の生活の積み重ねそのもののなかに、歴史学にとつての重要な着眼点や斬新な発想が秘められていることを具体例をもつて私たちの目前に鮮やかに描きだす。そして、その基本には、田畑を営み、海に生き、山に暮らし、ものを作り商つた人々の知恵と技術によつて豊かに織り紡がれた地域文化の積み重ねこそが日本列島の歴史の骨格を形作っているという、著者の活力ある歴史観があり、そこに源を発した大きなうねりは本書のなかを滔々と流れているのである。

門田誠一（大学文学部嘱託講師）

深田進 大森正一 村田誠一 清瀬みさを共著
『芸術表現 5つの焦点』

(法律文化社・発行一九九四年五月)
B5判・二九〇頁 二、六七八円)

本書は書名のとおり、芸術表現に関する五つの基本的な問題に焦点を当て、できるだけ現代の視点から芸術の理解をえようとしましたものです。四人の執筆者が度重なる討論で確認し合ったことは、芸術を人間の創造的な固有の表現活動として、できるだけトータルに捉えようとしたということですから。本書はなるべく多くの読者に親しんでもらうため、二五〇枚以上の写真を付けています。

最初の焦点はまず、芸術表現そのものについての基礎的・理論的な理解です。すなわち、芸術とは何を、どのように表現するのか、また、そもそも芸術がどうして創造的な表現活動とみなされるに至ったのか。さらに、現代社会において芸術表現はどのような意義をもっているのか。こういった芸術表現に関する基本的な諸問題を、西洋の美学や芸術の理論から、できるだけ分かりやすく記述しました。ところで芸術は

個々の色や形、音や言葉などに具体化され、しかもそれは歴史的に変化してきました。そこで二番目に芸術の歴史性に焦点を当て、第二章の「芸術の歴史と研究」は、歴史的に形式されたかたちや言葉を通して、人間の精神活動そのものに迫ろうとしたものです。とくにデュラーの「メランコリア1」という具体的な作品に即して、芸術の歴史を学ぶということはどういうことなのか、また、それはどのようにしたらよいか、こうした芸術の歴史的研究の基礎的な諸問題が、主にルネサンスを中心に述べられていますので、これは芸術の歴史的理解には大いに役立つだろうと思います。

本書が「芸術世界のひろがり」と題して第三の焦点としているのは、近代社会における科学技術文明と芸術表現との関わりです。近代社会における資本主義やテクノロジーの発達には、芸術の概念そのものを考え直さなければならぬくらい、芸術表現にも大きな影響を与えました。とりわけテクノロジーの高度の発達により、芸術表現がどのような新たな可能性を自覚していったのか、主に抽象主義などの二十世紀の美

術、そして映画とデザインなどに即して、分かりやすく述べられています。

後半の第二章は、こうした新しい多様な芸術表現の世界を、固有の表現活動としてトータルに捉えようとした、意欲的なひとつの試みと言えるでしょう。とくに最後の焦点となつている「芸術表現の構造と作品の世界」は、物語的世界、宗教的幻想世界、世界像、四季といった伝統的な主要な表現テーマに即して、作品世界の存在構造を明らかにしようとしたものです。

はたして芸術表現の世界をトータルに捉ええたかどうか、読者のご批判を待つばかりです。

村田誠一(天学文学部助教)

室田保夫著

『キリスト教社会福祉思想史の研究』——「一国の良心」に生きた人々——

(不二出版・発行一九九四年九月
A5判・五五二頁 一三、〇〇〇円)

社会科学の構成は、理論・歴史・政策の三部門よりなる。社会科学の一環としての社会福祉学の研究は、その歴史的構成の間のひろさ、奥行の深さによつて、全体的規模と客観的な確かさを保證される。まことに得難い書が、質実謙虚の学徒(本学社会福祉学専攻、高野山大学助教)によつて公刊された。

この五五二頁の大著をもつて、著者が私たちに語りかけているのは、明治以降のわが国の社会福祉活動の最前線に活躍した特色ある開拓者群像のなかに、同志社人の占める高さ・ひろさ・深さである。

日本社会事業史と云えば、留岡幸助、山室軍事、牧野虎次等を思い浮かべるが、その思想的根源が、同志社新島襄先生の「一国の良心」教育に淵源しているというのが、

著者が本書に敢えて「一国の良心に生きた人々」という副題を付した理由である。

説き起すのは、序章「一国の良心——新島襄、ラーネッド、そして石井十次——」今日、日本私学界に大をなす同志社が、未だ創立の成否も定かではない当初、「吾人は即ちこの一国の良心とも謂うべき人々を養成せんと欲す」と唱え、国の根本にキリスト教主義人格教育の大義をもつて、福祉・医療の徹底を期した「一国の良心」運動のすさまじさである。石井十次は同志社出身ではない。しかし新島と一国の良心に分ち合う戦友として、同じ良心の射程に入る人物であつた。

留岡、山室などの巨星と並び輝く人材の中に、監獄改良事業に挺身した北海道バンドの大塚素、救世軍医松田三弥、職業紹介事業開拓の八浜徳三郎・緒方庸雄、感化事業の小塩高恒・品川義介、地域福祉に献身の尾崎信太郎、神崎喜一郎、平和運動の深みに徹した柏木義円牧師等、その名の聞え実績の必らずしも詳らかでない諸先輩の記録に、活眼を与える。

第六章高橋元一郎の生涯は、異才の多い

同志社人にも稀れな数奇の人生行路を辿っている。全体に枯淡の筆致に近付きつつある室田兄の文章のなかでも、次々に生起する意外な場面の展開に刺戟されて、とりわけ躍動感のひらめく心魅かれる文章である。

同志社は、「キリスト教社会問題研究会」(人文研)を中心に、その分野で最大級の文献を所蔵し、地味で粘り強い研究グループが形成され、杉井六郎兄や室田兄はその中心の人材である。その膨大な文献に身を埋めて、盡きることのないテーマが引き出される。ただ事実を伝え続ける「伝承」ではなく、過去の豊かな歴史のなかの分析・批判の中から、新しい歴史的創造の展開される「伝統」こそ、同志社が室田兄たち良心グループに期待する祈りなのである。

同志社人はもとより、ひろく世の生涯学習のテキストとして、まことに有意義な書物のうまれたことを感謝したい。

嶋田啓一郎(同志社大学名誉教授)

J・ラズ（深田三徳編訳）

『権威としての法……法理学論集』

（勁草書房・発行一九九四年十月）
（B6判・三五六頁 三六〇五円）

本書は、現代分析法理学の旗手の一人でオックスフォード大学教授のJ・ラズによる論文八編の邦訳である。これらの論文は'77-'93年に出版されたもので、第三回「神戸レクチャー」（国際法哲学会社会哲学会日本支部および日本法哲学会主催）のために来日するにあたって、法理学関係の自己の論文の中からラズ理論を知る上で重要であるとして著者自らが選んだものである。

本書では、「法の性質」をめぐる議論の特色、法的妥当性、法的欠缺、権威、法的推論、権利など、伝統的な分析法理学に特色的な主題について、多岐にわたる詳細な議論が展開されている。その基本的な方法は、「法社会学」的な事実の実証的な検証ではなく、論理の一貫性と説明・理解の簡便性を中心とする熟考であるし、理論的仮構や思実験としての歴史的考察はあっても、歴史法学や「法の歴史哲学」と呼べるような歴史的視点をもたない「分析的方法」であ

る。また、その視座は、H・L・A・ハートの「法概念」のそれを踏襲するもので、その理論は、全体としては、ハート理論を継承的に発展させ、その批判によって生じたほころびを煩雑とも思えるほどの概念的区分や道具立てによって繕っている感じにもたれるし、その緻密な議論の展開のわりには、結論は平明で常識的である。

本書を通じて看取される一つのテーマは、「源泉テーゼ」と呼ばれるテーゼを弁護し確立することである。源泉テーゼとは、すべての法は源泉（立法行為や司法的決定などの社会的事実）に基づくものであり、法の存在と内容はいかなる評価的議論に頼ることなく社会的事実だけによって確認される、とするものである。このテーゼのねらいは、道徳的議論や評価的議論なしに確認できる拘束力ある規範的指令やルールを抽出し、それが「法」の顕著な特色であると見ることによって法実証主義の主要な主張を擁護すると同時に、それを中心に置いて法現象を、法制制度や法適用制度を特色づけることができるとする制度的な視点から分析することにある。この源泉テーゼ

を論証するために、評価的議論をせずに拘束力が承認される「権威」概念が重視され、人々が源泉についての「権威」を認め、法の正当化のための評価的議論を持ち出さずにそれを受容し「盲目的に」服従するという、法の権威の側面が強調されることになる。このような源泉テーゼの固守は、R・ドゥオーキンによって厳しい批判にさらされたハート型の法実証主義理論を最構築する意義をもっている。

なお、本書には、ラズ理論の全体像を知る上で有益な、深田三徳教授による詳細な解説が付けられている。また、本書以外に、ラズ自らが来日に際して選出した政治哲学関係の論文が翻訳されている（『自由と権利……政治哲学論集』（勁草書房））ので、併せて参照されたい。

山崎康仕（神戸大学国際文化学部助教）

仲村研著

『山国隊』

(中央公論社・発行一九九四年十月)
A6版 二五〇頁 六〇〇円

本書は一九六八年学生社から発刊された著書の文庫版である。著者仲村研先生は一九九〇年三月不帰の人となった。この文庫版は、夫人仲村明子氏の熱意と本書で解説を書かれた森浩一教授の尽力により中公文庫に収録されたものである。仲村先生と親しく接し、学恩を受けたもののひとりとしてうれしい限りである。

本書の内容は、維新时期に丹波山国地方(現北桑田郡京北町)で結成された農兵隊である山国隊が「官軍」の構成メンバーとして因幡鳥取藩に付属して出征し、帰還するまでの経過を山国隊に参加した人々の手記(藤野齋の『征東日誌』が中心)をもとに詳細にそして臨場感豊かに展開したものである。さらに本書にはもうひとつの筋がある。人文科学研究所の共同研究が丹波馬路村研究から山国地域へと発展していく過程とともに、先生が各地に飛び資料を渉猟していく過程、すなわち「どのように資料をさが

し、どのようなことがだんだんわかってきたか」が具体的に描かれる。これが本書のもうひとつの構成糸であり魅力である。たとえば、調査の過程の副産物として先生の幻の先祖景山龍造の実像を追いかけていく姿は我々を楽しくさせる。資料に対してどこまでも貪欲に追求していく若き日の先生の姿を彷彿させる書物である。

学生社版が発刊されたとき、草莽諸隊の研究はまだ充分な蓄積はなかった。今日十分とはいえず、「偽官軍」として新政府によって壊滅させられる赤報隊等他の草莽諸隊に関する事実がより明らかになっていると、先生が存命であれば、それらの草莽諸隊との比較も加えて叙述をより立体的にすることは可能であったろう。そうすれば、山国隊の鳥取藩付属と費用自弁のもつた意味が維新史研究の中でより浮かび上がったであろう。ただ、実は先生の強い関心は山国地域の村の在り方に向けられていた。そのことは、「明治維新を境にして、この地方の村落内部の身分秩序が、片影をとどめないまでには解消してしまうことと、山国隊という農兵隊の組織とは、深いつながりがあ

るのではないだろうか」という本書の底辺に流れる問題意識によくあらわれている。だから、山国隊の「東征」過程で名主層と非名主層の対立が次第に解消の方向に向かつていく事実は、先生のもっとも重視する事実であった。本書の最後が、「藤野齋と辻啓太郎は地方行政にたずさわる地位にいたが、ほとんどの隊員たちは、何事もなかったような顔で、山仕事や野良仕事に精を出すのである。そして明治五年以後、山国の人びとは、この地方に長い間つちかわれてきた名主と従士という身分差別を無用のものとし、それにまつわるいっさいの慣習と記憶を放りだすよう努力してきたのである」と結ばれているのもそのためである。中世村落史研究の泰斗のひとりであった先生の村落史研究の別の形をとったひとつの結実として本書を読むのがもっとも素直に本書から汲み取るべきものである。

高久嶺之介(人文科学研究所教授)

金丸輝男編著

『EUとは何か』

——欧州同盟の解説と条約』

（日本貿易振興会（ジェトロ）・

発行一九九四年十一月

A5判・二六六頁 一、七〇〇円）

国際法によって規律される主権国家間の関係という形で国際社会が初めて成立したのはヨーロッパにおいてであったが、このヨーロッパは一九五二年以来変貌を続けており、その目覚しい進展の仕方は世界の注目の的になっている。いくつかの段階を経てヨーロッパ諸国は対等の独立国家間の関係を越えて相互依存的な結合関係を作り出して来たが、この過程は現在「欧州同盟（EU）」という新しい名称によって示される、

これまでよりも一層緊密な関係の創設に達している。しかし、このようなヨーロッパにおける事態の急速なかつ条約の多くの複雑な改正を伴った進展は専門家以外の人々にとっては簡単にはついて行けない難解なものになっており、分かり易い解説が必要になってきている。この書物の刊行はこれに

じた極めて適切なものであると言うことができる。

この書物の前半は七人の執筆者によって分担された欧州同盟の解説に、後半は欧州同盟条約およびその付属議定書（欧州中央銀行制度および欧州中央銀行の定款に関する議定書、グレート・ブリテンおよび北部アイルランド連合王国を除く欧州共同体加盟国間で締結された社会政策に関する協定および西欧同盟に関する宣言）の翻訳に当てられている。

解説の第一章（金丸輝男）では欧州統合運動の歴史と欧州同盟の六つの特徴、すなわち、共通外交・安全保障政策の導入、司法・内務政策の協力の規定、欧州市民制度の導入、欧州人権条約の原則の共同体法の一般原則としての尊重、経済・通貨同盟に関する新しい措置の導入および補充性原理の導入についてそれぞれ簡明な解説が行なわれている。第二章以下においてはこれを敷衍する形で、第二章（児玉昌己）では欧州同盟条約誕生までの過程とそこでの問題点、第三章（鷺江義勝）では欧州同盟諸機関の権限および政策決定過程、第四章（金

丸・児玉）では経済通貨同盟設立を求めめる要因とその達成に向つての段階、第五章（児玉）ではエネルギー政策および欧州横断ネットワーク、第六章（荒岡興太郎）では教育、職業訓練および青年政策、第七章（竹中康之）では社会政策議定書および社会政策協定、第八章（福田耕治）では環境および消費者の保護政策、ECオンブズマン、地域政策および欧州同盟市民権、第九章（辰巳浅嗣）では共通外交および安全保障政策についての解説が行なわれている。いずれの章も多くの論題を網羅しながら体系的で分かり易くまとめられている。条約および付属議定書の訳文も平易で読み易い。EUが国家結合における国家連合と連邦国との中間の形であることを示すためにこの書物では同盟という訳語が使用されている。

高橋 悠（天学法学部教授）

薬師川虹一詩集

『疲れた犬のいる風景』

(文章社・発行一九九四年十二月)
A4判 三〇〇〇円

この詩集は、ここ二十年程の詩人の自画像であり、心象風景であり、生活点描である。すでに還暦も過ぎた。家庭をもち、子をもうけ、その子がまた子をもうけ、父を看取り、見送り、飼犬も三代目……。もう種としての人間の義務もあらかた果した人だ。でも個体としての人間の生き様への想いが残っている。それを一見淡々と詠っているようにみえるが、なんの、実は、己れを含めた人間観察がいつ吐け口を見出して奔騰するかもしれない激みのように凄さを堪えている。「階段」が気になって仕方がない。「終りがわからなくなって恐しくなる」が「行き先を忘れて黙々と昇る」。降りるのも昇るのも「苦い味がする」。昇ることが願いなら「たのむ、そのままの姿で立止ってほしいのだ。それは詩人の「からだの中の階段」なのだ。これは時には自虐に通ずる。自分を「疲れた犬」のように歩いてゆく「あの男」に擬する。自分に「粘着力」のある

「不透明な部分」があると詠う。しかもそれは若い頃のそれとは違うのだ。それがいつからなのだろう。「あの時」からなのだ。確定しがたいが「あの時」からだ。

そういう「僕」を詩人は悲愴に受け止めるわけではない。自虐こそすれ、それをヒューモラスに観察する。だから「還暦」を「楽しみ」もするし「冗談にもする」。人生「大平楽」を並べて何が悪い、と開き直る。人皆道化なのだ。電話ボックスで「観客もなく演出家もいないのに」口を「ばくばく動」かしている道化なのだ。電線が切れているのに「楽し気な告白」をしている。でも「電線の切口」から声は「血の雫になって散る」。詩人はそういう自分を「案山子」に、「横倒しになった……ドラム罐」に見立ててみせる。

詩人はしかし、家庭の中に静かに佇んで、可愛い孫をじつと観察する片鱗はみせる。「ポリ袋に／泥水を入れては／目の高さに揚げている」幼児、針を水に浮かせてみせようと懸命に努力する自分の指先を凝視している孫たち。それはそれで心暖まる一刻の家庭図である。しかし水に浮いた針は「危

うい均衡」を保っているにすぎない。総じてこの詩集は、シニシズムとユーモア、愛情と嫌悪、外的世界の矛盾とそれを傍観する自分との「危うい均衡」の上に、かすかに遙れている。

感覚的に鋭い詩語は見事である。べたつてはりつく「牛乳の皮」。「血溜となつて咲いている」彼岸花。火葬場の轟と響く音は「時間を焼き切る」と勁烈な表現が与えられる。

薬師川虹一氏は英文学者、同志社大学名誉教授である。その該博な知識と精緻な論旨はつとに定評がある。しかし学者と詩人の両立。かつて私もころざしたことはあるが、とてものことこの二つの世界を同じ軌道にのせられなかった。薬師川氏はそれを果しておられる。見事。羨望と敬意を禁じえない。

因みに本詩集は氏の第三詩集である。

齋藤 勇 (大学文学部教授)

山内弘継著

『達成動機づけとそれに関連した行動の分析』

(近代文藝社 発行一九九四年一月) (B5判 二〇六頁 二、五〇〇円)

達成動機は、やる気の心理学ともいわれ、困難なことや障害に打ち勝って高い目標に達しようと人間を駆り立てる力であり、多様な社会的動機の中で最も研究の進んでいる動機である。著者はこれまで、達成動機に関する理論や研究方法を論じ実験報告を積み重ねてきた、我国におけるこの分野の中心的な研究者である。本書において著者は、行動に与える達成動機とこれに関連する種々の要因の効果を、多くの研究者による実験成果に著者自身の研究成果を加え、明らかにすることを試みている。その結果、読者は達成動機に関する研究の到達点と問題点を知ることができる。しかし、個々の専門用語や具体的な実験方法についての詳しい説明に欠けるところが、この分野の研究に始めて触れようとする人には難解な点があることは否めない。

達成動機の理論的基礎はマクレランドの感情喚起モデルに基づく。このモデルによると、期待と知覚との間の「ずれ」が快と不快の感情をもたらし、この感情が行動を統制する動機を喚起する。人は期待の水準を変化させ、最適な水準のずれを作りだし、快をもたらすことよって動機を持続していく。このように達成動機は、期待の水準、刺激の状態の知覚、ずれの判断など、人間の内部で生じる複雑で高度な認知システムの働きを仮定している。

第一・二章では、達成動機の基本的概念と測定法の信頼性について実験的に検討を加えている。第三章で著者は達成動機の因子構造を論じ、達成動機が単純な一元構造ではなく、三つの心理的側面―成功達成動機、失敗回避動機、成功・不安の両傾向の合成的達成動機―から構築されていることを明かにした。この結果をもとに、達成、失敗不安、成功不安の三つの達成関連動機に関する測定尺度を作成した。さらにこれらの尺度の英語版が作成され、達成動機についての交差文化的研究へと発展した研究が報告されている。この一連の研究は内外

で高く評価されている。

第四・五章はアトキンソンにより発展させられた達成動機の精緻な理論である、期待―価値説に基づく行動予測の実験的検討を行っている。本説によれば真の動機づけの大きさは達成への動機づけと失敗回避の動機づけを加算したものであり、それぞれの動機づけは、動機、期待、誘因の三つの変数を乗じたものよって決定される。初期の実験的研究は、この期待―価値説を検証するために捧げられたが、その後、長期にわたる未来にむけての達成思考行動をも含めて予測する理論へと発展した経緯を明らかにしている。

第六章では、成功や失敗の原因についての信念とか感情に対する評価が達成行動に影響するというワイナーの因果帰着モデル、第七章では性差、第八章では発達の要因を取り上げ、著書の研究成果を加えながら実験の結果をまとめている。

達成動機が社会的な動機であり、それは文化的な背景によつて異なった効果をもつと予測される。近年、著者は達成動機の国際比較を行うために、各国の達成動機研究

者達と共同研究を行っている。心理学の理論的実験的研究が現実の社会行動の予測に適用された好例であり、一層の研究の発展が期待される。

岡市廣成（文学文学部教授）

竹部琳昌著

『ヘルダーリンと古代ギリシア』

（近代文芸社・発行一九九四年一月）
（A5版二四七頁 二、五〇〇円）

著書の竹部琳昌教授は、若き日に、「ギリシア悲劇と日本の能」（独文）により、エラスムス賞を受け、オーストリア政府の奨学金を得て、ウィーン大学哲学部を修了したドイツ語にも堪能な西洋古典学者である。

本書が論じているヘルダーリンは、ゲーテ、シラーとほぼ同時代のドイツの詩人であるが、その概略を知ろうと思えば、「ヘルダーリンとギリシア人」の項目から読み進めればよい。これはW・F・オットーの記念講演の翻訳である。われわれはこの好訳によって、ヘルダーリンのギリシアとの深いかかわりも分かってくる。すると、すぐ次のエムペドクレスとの関係を述べたヘル

シヤーの論文の訳文にもふれてみたい意欲をかき立てられる。

火・水・土・風の四元素を説いた古代ギリシアの哲学者が、ヘルダーリンに与えた影響の大きさについて知るのであるが、これは訳者の優れた語学力と、西洋古典に対する豊かな学識のおかげである。それと関連して、著者の「ヘルダーリンのエムペドクレス受容について」の論攷によって、ヘルダーリンの自然の概念をさらに深く把握することができる。

ほかに二点の論文「ヘルダーリンとソポクレス」、「ヘルダーリンにおける悲劇と変革」が取められているが、前者は「ビンダーの「ソポクレスとヘルダーリン」、後者はベルトの「ヘルダーリンとフランス革命」のそれぞれこなれた訳文と重ね合わせて読めば、より一層の理解が得られるであろう。とりわけ著者は、ヘルダーリンがフランス革命に感動したことは認めながらも、ベルトの「革命詩人」という解釈とは一線を画し、緻密な実証的方法をもって、詩人の諸論文から、「変革」の思想を考察していることに注目しなければならぬ。

本書は、ヘルダーリンを通じて、古代ギリシアと近代西欧との橋渡しを試みる労作を、広くとらえることができる。ヘルダーリンの後半生は、狂気の世界をさまよったのであるが、この運命を受け入れるばかりでなく、それを愛し、自然との共生を心から願った詩人に、ポストモダニズムの思想を、評者は本書から読みとることができる。

河野 収（文学言語文化教育研究センター教授）